



👁️👁️ みどころ

私の『SHOW HEY シネマルーム』の出版は52冊になったが、ホン・サンス監督作品はキム・ギドク監督の合計22作、計25作となった山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズを抜き、本作が第27作目だ。

本作では、第26作目の『あなたの顔の前に』（21年）（『シネマ51』226頁）ではじめて主演に起用したベテラン女優イ・ヘヨンと、ホン・サンス監督のミューズたるキム・ミニの共演が実現！すると、『小説家の映画』とは、きつと・・・？

劇中劇は面白い！それが私の“持論”だから、長らく執筆が遠ざかっている著名作家が、このところ出演作が途絶えている女優を起用した映画作りの物語を会話劇で構成した本作では、ラストに上映されるはずの“劇中劇”に注目！そう思っていたが、アレレ、アレレ・・・。

早く、安く、おいしいの“吉野家”路線を徹底させているホン・サンス監督は、既に第28、29、30作目を発表しているから、本作を含め、今後もその快進撃に注目！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ホン・サンス監督第27作目を鑑賞！主演は？共演は？■□■

韓国には注目すべき監督がたくさんいる。近々シネ・リーブル梅田で4Kで上映されるイ・チャンドンもその1人だが、私が最も注目していた韓国の監督はキム・ギドク。しかし、キム・ギドクが2020年に亡くなった後は、断然ホン・サンス監督だ。

私は、同監督作品については『正しい日 間違えた日』（15年）（『シネマ42』294頁）、『夜の浜辺でひとり』（17年）（『シネマ42』299頁）、『それから』（17年）（『シネマ42』285頁）、『クレアのカメラ』（17年）（『シネマ42』290頁）、『逃げた女』

(20年)『シネマ49』341頁)、『カンウォンドのチカラ』(98年)『シネマ49』346頁)、『オー!スジョン』(00年)『シネマ49』350頁)、『イントロダクション』(20年)『シネマ51』222頁)、『貴方の顔の前に』(21年)『シネマ51』226頁)を見てきた。

しかして、彼の第27作目となる本作の主演は、『あなたの顔の前に』ではじめてホン・サンス監督作品に出演した韓国のベテラン女優イ・ヘヨン。そして、共演するのは『あなたの顔の前に』ではプロデューサーの立場で、出演はしなかった、ホン・サンス監督のミュージズであるキム・ミニ。したがって、ホン・サンス監督作品でイ・ヘヨンとキム・ミニが共演するのは本作がはじめてだ。

■□■冒頭の舞台は書店。先輩と後輩の会話劇からスタート!■□■

本作はイ・ヘヨンとキム・ミニの共演だが、『小説家の映画』とタイトルされているように、イ・ヘヨン演ずる小説家のジュニが主役で、キム・ミニ演ずる女優のギルスはその支え役に徹している。

1982年生まれの子・ミニに対して、イ・ヘヨンは1962年生まれだが、本作はジュニは長らく執筆から遠ざかり、ギルスは近年出演作が途絶えているという設定だから、ハッキリ言って“落ち目のおばさん”同士の共演というスタイルになっている。冒頭の設定も、そんなジュニが、ソウルから少し離れた閑静な街で小さな書店を営んでいる、かつての創作仲間だった後輩(ソ・ヨンファ)を訪れるところから始まる。そして、ホン・サンス監督作品の“定番”通り、突然の先輩の来訪に驚きながらジュニを店内に招き入れた後輩と先輩・ジュニとの“会話劇”から物語がスタートしていく。

しかし、ジュニはなぜ突然後輩の書店を訪れてきたの?それ自身が冒頭からハッキリしないので、少しモヤモヤ感を持ちながら、その後の、この街の名所であるユニオンタワーでの顔見知りの映画監督ヒョジン(クォン・ヘヒョ)とその妻ヤンジュ(チョ・ユニ)夫妻との出会いと会話を迎えることになる。そして、その会話の流れの中から、公園を散歩中のギルスとの出会いが実現することに。これらはすべて偶然の産物(流れ)という設定だが、私が観ている限り、これはすべてホン・サンス監督にとって必然の流れ・・・?

■□■“カリスマ性”とは?会話のぎこちなさにも注目!■□■

日本人は昔から漢字をはじめ、あらゆる文化を大陸(中国)から器用に取り入れてきた。しかし、幕末から明治維新にかけては一転して、一方では、「尊王攘夷」を唱えつつ、他方では、欧米の近代文明をいち早く取り入れた。さらに、1945年の敗戦後は、それまでの“鬼畜米英”から一転して、アメリカ一辺倒(追随)となり、ヤンキー、パンパン、ブルース、ジャズ、ティールーム等々の和製英語が溢れ返った。1960年に起きた日米安保条約を巡る一大国民運動では、社共を中心とする反米思想も強かったが、60年安保に続く70年安保闘争が収まり、戦後日本の高度経済成長政策が軌道に乗り始めると“日米の絆”が強まり、今や“日米同盟”は“アジア太平洋の基軸”という位置づけになってい

る。

それと共に、“外来語”はますます豊富になったが、“カリスマ”もその1つだ。中国語では外来語を日本のようにそのままカタカナで書く習慣はなく、すべて漢字を当てているが、韓国語では“カリスマ”という外来語は、“コーヒー”と同じように(?)ほぼそのまま使われているようだ。ここでなぜそんなことを書くのかというと、本作導入部の①書店、②ユニオンセンター、③公園を舞台とした“会話劇”では、ジュニについてさかんに“カリスマ”という外来語が登場するからだ。「あなたにはカリスマ性がある」と言われて悪い気がしないのは当然だが、さて、何度もそう持ち上げられるとジュニの反応は？

本作導入部に見る、さまざまな会話劇はすべて偶然の出会いによるものだから、「久しぶり！」という形で話しやすい反面、どんな話題にどう触れたらいいのかの“距離感”がつかみにくいから、何かしらのぎこちなさ、気まずさが生じるのも止むを得ない。私は随所にそれを感じながら、導入部の会話劇を聞いていた(見ていた)が、ぎこちなさがあわや“論争(ケンカ)”になりかけたのが、ヒョジンによるギルスへの「もったいない発言」だ。つまり、このところ出演作が途絶えているギルスに対して、「もったいない。なぜ映画に出ないのか？」としつこく問い詰めた(?)ことに対し、ジュニが「何がもったいないの？自分のしたいことを楽しんで生きている人を尊重すべきよ！」と反発したわけだ。「和を以て貴しとなす」日本人は、コトなかれ主義の会話が多いが、何事も本音で語りたがる(?)韓国人はそうはいかないらしい。本作導入部に見る会話劇では、そんな日韓の違いについてもしっかり考えたい。

■□■いちご食堂から再び元の書店へ！議論の盛り上がりは？■□■

長らく執筆から遠ざかっている小説家のジュニと、近時出演作が途絶えている女優ギルスは、お互いの名前と顔は知っていても、会って話をするのは今日の公園での出会いがはじめてだ。しかるに、この最初の出会いですぐに2人が打ち解け、ジュニがギルスを起用した映画作りの話が一気に進んだのは一体なぜ？その一因は、前述したヒョジンによる「もったいない発言」に対するジュニの猛反発をギルスがしっかり見ていたためだが、この時点では映画作りが本当に進むのか否かはギルスの夫の出演 OK が条件だった。しかし、公園での出会いの後、昼食を取るため2人がいちご食堂に入って話し込み、さらに、ギルスにかかってきた電話を受けて、ギルスの先輩が主催する“ある会合”にギルスと共に向うくことにしたジュニが到着したのは、何とジュニがこの日最初に訪れた後輩の書店だったからビックリ。“ギルスの先輩”とは、つまり“ジュニの後輩”のことだったのだ。しかも、その会合はジュニが昔からよく知っている詩人(キ・ジュボン)を囲むものだったから、今日の会合は書店で働く従業員ヒヨヌ(パク・ミン)を含めて、意外な参加者総計5人の下でマッコリをたらふく飲みながら盛り上がりつついくことに。

そこでは、酔っ払って眠ってしまう直前のギルスが「私たちの映画はどんな物語ですか？」と質問したことに対し、ジュニが「物語はさほど大事ではない」と前置きしつつ、

その場で思いついたアイデアを話し、それを聞いた詩人が、「物語には力がないと駄目だ。物語は物語らしくないと」と異を唱えたから、さあ、その会話劇（議論）の盛り上がりは？

■□■劇中劇は面白い！しかし、「小説家の映画」は？■□■

「潜水艦モノは面白い」と同じように、私の持論は「劇中劇は面白い」。その代表例は、『恋に落ちたシェイクスピア』（98年）だ。

しかし、「小説家の映画」とタイトルされた本作も、ジュニとギルスの出会い、そして2人の会話劇の中で小説家による映画作りがテーマとなり、周りの人間を含めて「どんな物語になるの？」というテーマが少しずつ膨らんでいくから、本作ラストはきっとその劇中劇に！

誰もがそう思うはずだが、果たしてその予想通り、本作ラストの舞台は映画館となる。そこではギルスの夫の甥で、ジュニが製作する映画作りを手伝うことになったギョンウ（ハ・ソングク）に続いて、映画館のプログラマーをしているギョンウの友達の女性ジェウォン（イ・ユンミ）が登場し、試写上映のために大きな映画館の中にギルスを案内するシーンが描かれるので、それに注目！「小説家の映画」というタイトルはナン？それはどんな物語？それが全く明かされないまま、47分の短編だとされる同作を観るのはギルス1人だけだ。その間、ジュニは屋上でタバコを吸いながら“時間つぶし”をすることになったが、彼女がこの映画作りにどれほどの情熱を注いでいたかは、製作を手伝ったギョンウの口から語られることに。もっとも、『恋に落ちたシェイクスピア』における「劇中劇」は素晴らしい内容だったが、本作のそれはハッキリ言って、かなり手抜き・・・？

■□■製作費は？製作日数は？次回、次次回作は？■□■

ホン・サンス監督作品は本作で第27作目だから、キム・ギドク監督の合計22作や、合計25作も続いた山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズを抜く本数になった。その理由は何よりもホン・サンス監督の才能だが、より現実的な理由は、“吉野家の法則”、すなわち①早く、②安く、③おいしく路線の徹底が挙げられる。

時代劇は衣装代やセット代がかかるし戦争モノやアクションものは膨大な消耗品代がかかるが、2人ないし数名の会話劇をカメラで撮影して編集するだけの映画なら製作費は安上がりだし、製作日数もかからない。私の『SHOW-HEY シネマルーム』は年間2冊出版のペースが定着し、既に『シネマ52』まで出版した上、次回作『シネマ53』も既に準備できている。さらに、中国映画特集5となる『シネマ54』の製作もほぼ完了している。それと同じように、パンフレットによると、ホン・サンス監督も既に28作目の『WALK UP』、29作目の『IN WATER』、30作目の『IN OUR DAY』も発表し続けているそうだからすごい。まずは第27作目たる本作をしっかりと楽しんだ後、今後ますます続くホン・サンス監督の快進撃をしっかりと見守りたい。

2023（令和5）年7月18日記